

東京都公立小学校の校庭芝生化普及における阻害要因と解決策に関する研究
A study of factors against turfing school playgrounds and solution in Tokyo

1K07B306-0 氏名 太田 健児

指導教員 主査 原田宗彦 先生 副査 間野義之 先生

【緒言】

著者がイギリスのロンドンを訪れた際、芝生の公園で誰もがサッカーを楽しむ光景を至る場所で目にし、硬い土の校庭で体中あざだらけになる日本の練習環境との差に疑問を感じ、日本の校庭芝生化の必要性を感じた。『遊ぶ・学ぶ・育てる 校庭芝生化ガイドブック、2010年、東京都教育委員会』によれば、校庭芝生化は、校庭の安全性と快適性の向上、外遊びの増加、児童・生徒の精神的安定や落ち着き促進、気温上昇の抑制、砂埃の防止や抑制、自然学習などの教材としての活用、動物の生息や飛来場の創出、児童・生徒の社会性や自主性の発達、保護者の協力や地域コミュニティの形成がある。

それにも関わらず、現状では全国公立小中高における校庭芝生整備率が4.93%（文部科学省，2009）と、芝生化が普及しているとは言い難い。中学・高校に比べて使用による芝生へのダメージが最も少ない小学校でさえも、その整備率は4.77%（文部科学省，2009）となっている。芝生が子供や環境に対して影響を与えると考えられるが、現状では微増傾向で、急激な変化は見られない。

【研究方法及び研究目的】

本研究の目的は、校庭芝生化の阻害要因を明らかにし、その解決策を提言することで、校庭芝生化の普及への解決策を見出すことである。

校庭芝生化した東京都の公立小学校関係者2名、自治体関係者2名、施工業者1名、グラウンドキーパー1名、造園業者1名の、計7名に半構造化インタビューを行った。

【結果・考察】

各インタビューイーが語った校庭芝生化の阻害要因をまとめた。また、校庭芝生化すれば多大なメリットが得られることを示すため、校庭芝生化後のメリットについてもまとめた。

学校からは、阻害要因に、養生期間の校庭の使用制限、維持コストの捻出、教職員に手間がかかるなどが挙げられた。芝生化後のメリットは子供の体力向上、集中力向上、安全・怪我の防止、外で遊ぶ時間増加、自然への関心増加、生物への関心等、改めて子供に良い影響があることが確認できた。学校環境の改善、温暖化抑制・砂埃抑制、学校の地域交流の機会増加という、環境や地域での役割を果たす効果も挙げられていた。

自治体からは、阻害要因に、芝生が育たない気候、日照の少なさ、維持管理コストの捻出、自治体の税収格差・温度差、児童1人あたりの校庭㎡数、維持管理の難しさが挙げられた。一方芝生化後のメリットは、温暖化対策、CO2の削減、都市の緑化等が芝化後のメリットとして挙げられた。

専門業者では、阻害要因に、日本の芝生文化の違い、日本のスポーツ文化の乏しさ、行政の補助の概念の違い、スポーツ団体への貸過ぎ、プロのグラウンドキーパーの不足等が挙げられた。メリットは、子供たちの成長、スポーツ界への貢献があった。

【提言】

「芝生化したらあとはボランティア」という行政のやり方では、普及は進まない。「すべては子供のために」という大前提のもと、現状の維持管理体制の改革が必要である。現状のボランティア組織に頼った維持管理体制では、行政から補助を受けて校庭芝生化に踏み切ろうにも、条件面で諦める可能背があり、いつか増加数は頭打ちとなる可能性がある。

そこで、芝生化校に対しては、維持管理に伴う主な作業をプロのグラウンドキーパー主導で行うようにする体制を、ひとつの選択肢として提言したい。

現状では、あくまでボランティアが維持管理の主体であり、専門業者はそのアドバイザーの役割でしかない。補助金も、施工費に対して維持管理費は補助対象額が少なく、普及を妨げる要因である。維持管理の主体を専門業者にし、他の団体もそれぞれ少しずつ協力する。このような体制にすれば、教員やPTAにも快く関わってもらいながら、その学校に合った校庭芝生を、子供たちに提供できるのではないだろうか。そのためには、維持管理コストに対し、行政にどれだけ理解してもらうかが鍵となる。行政が「単年で予算を使い切る」「工事という名のものには補助が出る」という体制から脱却し、維持管理に対して、子供に必要な部分に対して、しっかりと予算化していく必要がある。